（2024 年 8 月 4 日）

# 第 47 回　赤松小三郎研究会　のご報告

日時：　2024 年 6 月 8 日（土）14:00～16:30
場所：　文京シビックセンター　４階 B 会議室
出席者：16 名

**【配布資料】**
資料－1　江戸の儒教と憲法構想 赤松小三郎らの建白書の背景に儒教はあったのか？～関良基氏
資料－2　赤松小三郎の歴史的な再評価に向けて（現状と課題）～滝澤進氏

**【内　　容】**

**1．江戸の儒教と憲法構想～赤松小三郎らの建白書の背後に儒教はあったのか？**

**発表者：関　良基氏**

（問題意識）

・　戦後歴史学の定説は、「『政府』についても『議会』についても明確な規定のなかった幕末の『公議会論』には新政治体制を創設する力がなかったのは当然で、『新政府』の性格は、旧幕府軍と薩長軍が鳥羽伏見で一戦してみて決めるしかなかった」とする。（坂野潤治「未完の明治維新」）

・　これに対し、尾佐竹猛は、「議会設置と大政奉還とは不可分の条件であった。しかし、薩長が『武力倒幕を為さん』と企図、ついに鳥羽伏見の戦争の勃発に至り、『砲烟、鳥羽伏見の窓を蔽ふて議会論は烟の如く消へ去った』」とする。（「維新前後に於ける立憲思想」）

（江戸の憲法構想）

・　ジョセフ・ヒコ、赤松小三郎、津田真道、西周、松平乗漠、山本覚馬等の優れた構想があり、明治維新以外に、近代に向かう多様な可能性があった。

（再評価される朱子学）

・　近年、朱子学は再評価されつつある。

（丸山眞男の朱子学批判）

・　幕末の儒学に関しては、保守的な体制教学であり、前近代的な封建思想であったとする理解が、丸山眞男以来の定説となった。

・　丸山は、江戸時代を封建教学である朱子学の崩壊過程ととらえ、朱子学批判によって作為的に現状を変えようとする吉田松陰、さらには福沢諭吉などの近代的な個人が出現し、近代的思惟は開花したと論じている。

（朱子学は近代化の阻害物だったのか）

・　佐久間象山は、朱子学は近代科学と共存可能とし、横井小楠や中村正直も、それぞれの立場から、朱子学を評価している。

（儒教の人権論は西洋の人権論を補完する）

・　西洋の人権概念は、個人に干渉しない政府が良い政府とするものであるが、
朱子学では国家にプラス行為をさせる論理であり、福祉と教育を充実させるための国家の機能は否定されない。

（なぜ戦後歴史学は幕末議会論を低く評価したのか）

・　マルクス主義者たちは、山内容堂の議会政治論を過小評価し、平和革命はまやかしであり、戊辰戦争によって武力で徳川軍を粉砕する必要があったとする。

（山内容堂は大政奉還に当たって赤松建白書を参考にしていた？）

・　薩土盟約・大政奉還建白書・赤松小三郎「建白書」には、多くの共通項があった。

（現行憲法の基本的人権は、慶応４年既にその必要性が指摘されていた）

・　加藤弘之が、「立憲政体略」を、何を種本として書いたのかは明らかではないが、生存権や職業選択の自由の優先順位を高くしているのは、儒教的素養が背景にあったからではないか。

・　「立憲政体略」では、「国憲」に書き込まれるべき最小限の基本的人権を掲げており、現行憲法の基本的人権は、慶応４年にその必要性が指摘されていた。

（福澤諭吉の儒教批判と渋沢栄一の儒教評価）

・　福澤諭吉は江戸を否定し西洋近代化を受容し、渋沢は江戸の儒教ベースの近代化を目指した。

（結論）

・　江戸の儒教的伝統から人間の個性・福祉・教育を重視する近代国家は生まれたはず。

（なぜ戦後歴史学において幕末議会論が無視されてきたのか？）

・　次の虚構を否定しない限り、赤松小三郎の復権はできない。

①　「幕末議会論」は西洋思想だけの受け売りだった。

②　「幕末議会論」の実態は、未熟な封建議会論だった。

③　徳川の体制イデオロギーである朱子学は、封建教学で近代を準備できなかった。

## 2. 赤松小三郎の歴史的な評価に向けて（現状と課題）（発表）

**発表者：滝澤　進氏**

概要：

・　赤松小三郎の歴史的な再評価のためには、小三郎の事績、近代化に果たした役割等についての周知活動を、関係者が力を合せ、様々な機会を通じて、展開していく必要があるとして、次の諸点についての説明があった。

①　「明治以降の歴史的な再評価に向けてのできごと・取組み状況」

②　「顕彰・研究活動等の概況」

③　「今後の課題等」

〇事務局よりお知らせ

・8月の研究会はお休みです。

・次回の第48回研究会は、2024年10月12日（土）開催予定です。
詳細が決まり次第にHP・メール等でご案内します。

（記録：滝澤進・荻原貴）